歴史を語る建物たち 庄内編（第13回）

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成８年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

松ヶ岡開墾場（鶴岡市羽黒町）

鶴岡市羽黒町ののどかな田園風景の中に、突如、巨大な木造建築群が現れる。かつて養蚕の一大中心地であった松ヶ岡開墾場で、平成元年に国指定史跡となった。明治初期に10棟の蚕室が建てられ、５棟が現存している。

「賊軍」の汚名をそそぐ

戊辰戦争に敗れた庄内藩は、西郷隆盛などの計らいによって異例ともいえる寛大な処置で済んだが、廃藩置県で武士の多くは職を失う結果となった。そこで、一計を案じた家老の菅実秀（すがさねひで）は、明治５年に士族約3,000人を月山麓の原生林に集め、わずか３年で311ヘクタールの桑園を造成した。そして、開墾地を訪れた旧藩主の酒井忠発が、「松ヶ岡」と自筆した木札を立てたことから「松ヶ岡」と呼ばれるようになった。その後、開墾士17名が養蚕の先進地である群馬県の島村（現在の伊勢崎市）に研修に行き、明治10年までに10棟の大蚕室を建設した。

明治新政府は、禄（武士の給与）を失った士族の生活救済のために、農業や商業を奨励する「士族授産」という施策を展開した。北海道開拓に従事した屯田兵などは、その代表例である。しかし、松ヶ岡の開墾は、戊辰戦争に敗れて「賊軍」のレッテルを張られた庄内藩が、養蚕によって、当時の日本の主要輸出品であった生糸の生産に貢献し、もって賊軍の汚名をそそぐことが目的であった。その心意気は、視察に訪れた、政府高官の大久保利通や三條実美などにも伝わったようである（武山省三編著『凌霜史　松ヶ岡開墾場120年のあゆみ』）。

大正期の松ヶ岡開墾場蚕室。明治初期に建てられた10棟のうち５棟が現存している。
出典：目で見る鶴岡・田川の100年（郷土出版社）

なお、大蚕室の設計・施工には、後に旧西田川郡役所や旧鶴岡警察署庁舎（いずれも国指定重要文化財）を手掛けた高橋兼吉も加わっている。高橋にとって、実質的には初の大仕事であったが、その腕前が高く評価され、後の活躍につながった。

全国的にも珍しい現存の蚕室群

大蚕室の建設にあたっては、日本一の建物を目指して、研修に行った島村の蚕室の、ほぼ倍の大きさの建物が造られた。また、屋根には、当時解体された鶴ヶ岡城の瓦が使われた。なお、建設された10棟のうち、２棟は消失、３棟は、他の建物を再建するための建材として使われた。明治時代は建材が貴重で、大蚕室に用いられた大量の建材は重宝されたのである。したがって、最終的には大蚕室は５棟になったが、当時の開墾士の末裔（まつえい）で、松ヶ岡産業㈱の企画部長を務める清野忠さんは、「これだけ大きな蚕室が５棟もまとまって残っているのは、全国でもほとんど例がない」と話す。

戦後も松ヶ岡では蚕の飼育が行われたが、県内での養蚕業が衰退したことから、昭和52年に養蚕の幕を閉じた。奇（く）しくも、10棟の大蚕室が完成してから100年目の年であった。

しかし、蚕室としての役目を終えても、建物は解体されることなく残った。昭和58年には、旧一番蚕室が開墾の歴史を展示する記念館となり、現在に至っている。他の蚕室も、ギャラリーや農具館などに活用された。なぜ解体されなかったのかは定かではないが、結果的に、往時の姿を今に残す貴重な文化財となったのは幸運といえよう。

天皇陛下にお褒めの言葉をいただく

平成28年９月10日、11日に、山形県庄内地方で「第36回全国豊かな海づくり大会」が開催され、天皇皇后両陛下が来県された。そして、養蚕に造詣の深い皇后陛下は、来県にあたって松ヶ岡開墾場のご見学を望まれたという。

海づくり大会が終了した翌９月12日、天皇皇后両陛下が松ヶ岡開墾場にお見えになった。旧庄内藩主酒井家18代当主である酒井忠久氏の案内で松ヶ岡開墾記念館を見学された後、天皇陛下は、建物がよく残されていることに対してお褒めの言葉を述べられたそうだ。清野さんは、「これまで、建物（旧蚕室）の補修は行われてきましたが、私が生まれる前から、そこに蚕室が存在していたこともあり、建物自体にはあまり思い入れはありませんでした。しかし、天皇陛下のお言葉を知って、後世に伝えていくことの大切さを感じ入り、背中を押されたような気がします」と話す。

なお、松ヶ岡開墾場では、平成22年からお茶の試験栽培も行っている。明治時代、お茶は生糸に次ぐ日本の主要輸出品であり、松ヶ岡開墾場でも栽培が試みられたが、気象条件などが合わずに数年で断念した。清野さんは、「商業ベースに乗れば日本最北端のお茶の産地になる。明治期の開墾士が叶えられなかった夢を今につなげたい」と意気込む。

過渡期を迎えた松ヶ岡開墾場

平成23年、松ヶ岡開墾場と鶴岡市が協力して始めた「鶴岡シルクタウン・プロジェクト」の一環として、松ヶ岡開墾場での蚕の飼育が復活した。そして、平成26年には、地元住民と鶴岡市が一体となって『松ヶ岡地域振興ビジョン～松ヶ岡開墾場史跡パーク（仮称）構想～』が策定された。

また、鶴岡中央高校の「シルクガールズ」による、シルク素材を使った自作ドレスのファッションショーや、蚕が繭を作る際に最初に吐き出す糸「きびそ」を使った商品ブランド「kibiso」は徐々に知名度を上げている。さらに、平成29年４月28日には、鶴岡市が「サムライゆかりのシルク　日本近代化の原風景に出会うまち鶴岡へ」で日本遺産に認定された。そして、平成28年度からは、所有者が分かれていた松ヶ岡開墾場の土地建物を、鶴岡市が一括して所有することになった。

清野さんは、こうした一連の動きを“過渡期”とみる。「松ヶ岡開墾場綱領ができたのが大正15年。開墾が終了した明治７年から50年以上が過ぎていました。養蚕業が盛んになる中で、今一度原点に立ち戻って『人として正しい道は何なのか』を考える必要があったのだと思います。昭和52年に松ヶ岡が蚕の飼育を止めて、今年でちょうど40年。今は、いろいろな流れの中で、自分たちに何ができるのかをあらためて考える時期なのかもしれません」と語る清野さんからは、開墾士の末裔としてのプライドが感じられた。

（東北公益文科大学特任講師・山口泰史）

旧三番蚕室で今年６月に作られたばかりの繭。清野さんが、蚕が繭を作る際に最初に吐き出す糸「きびそ」を見やすくほぐしてくれた（筆者撮影）。